

イスラエルの人々⑰

□イスラエルの人々の信仰の手本

すると主はモーセに言われた。「あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上に付けよ。かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きる。」モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上に付けた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた。

(民21:8~9)

□前回までの振り返り

1. エジプトを出てから2年目の第二の月(5月)20日、いよいよ約束の地に向けてシナイ山のふもと(シナイの荒野)から出発した。
2. 約束の地を目前にした宿営地は、パランの荒野のカデシュ。申命記1:19では「カデシュ・バルネア」。約束の地を目前にして、カデシュ・バルネア事件が起きた。この事件は、イスラエルが主を試み、主の声に聞き従わなかった出来事の10番目。エジプトと荒野で主の栄光を見ながら、十度も主に聞き従わなかったイスラエルのその時の世代は、ついに約束の地に入ることができなくなり、荒野の旅は40年続くと宣告された。
3. イスラエルの民は約束の地を背にして再び荒野の奥へと進んで行った。その旅の中で、コラによる反乱事件が起きた。首謀者はレビ族のコラ、これにルベン族のダタンとアビラムが共謀した。彼らの住まいの天幕は、足もとの地面が割れて、家族や所有物とともに地の中に呑み込まれた。また反乱に同調し、主の前で香をたいて立っていた250人は、主から出た火により焼かれて死んだ。
4. 前々回は、コラ事件の翌日に起きた大乱事件であった。イスラエルの人々がモーセとアロンに向かって「あなたがたは主の民を殺した」と言って、二人に逆らって結集したので、神の罰が人々に下った。
  - (1) アロンが宥めの香をたいて、死んだ者たちと生きている者たちとの間に立ったとき、罰は終わった。これにより死んだ者は、14,700人であった。
  - (2) 主は、アロンの祭司職が神によって立てられたことを明らかにして、イスラエルの人々の不平を鎮めるために、モーセに命じて、十二部族の各部族長の杖を集めさせ、幕屋の中にそれらを置かせた。翌日見ると、レビ族のアロンの杖だけが芽を出し、つぼみをつけて、花を咲かせて、アーモンドの実を結んでいた。
5. この事件の後、荒野の旅は38年間続くが、その間の記事はない。前回は、荒野の旅も40年目に入り、宿営地は再びカデシュ、民数記20章、メリバの水事件であった。この事件でモーセとアロンは主の命に従わなかったために、二人とも約束の地に入れなくなった。カデシュを旅立ち、ホル山に着いたとき、アロンが死んだ。
6. 今回は、ホル山から旅立ったあとに起きた事件、民数記21章、燃える蛇事件である。

## □イスラエルの人々⑰ 燃える蛇事件

1. ホル山から、再び約束の地から離れていくコースに入ってしまった（民21：4～5）。そのようなことになった経緯は次のとおり。

- (1) ホル山に来る前の宿营地カデシュは、約束の地を目前にした場所であった。ただし、カデシュから約束の地に入るためには、エドム人の領土を通らなければならない。モーセはエドム人の王に通行を認めるように要請したが、断られた。そのため、イスラエルは向きを変えて、エドム人の国境沿いにホル山まで来た。（民20：14～22）
- (2) 主の命によりホル山でアロンが死んだ。イスラエルの全会衆は30日間の喪に服した（民20：23～29）
- (3) ホル山を旅立つと、エドムの地を迂回しようとして、南の紅海に向かう道を進んだ。再び約束の地から離れて行く。その途中で民の不満が爆発した。

21：4～5 彼らはホル山から、エドムの地を迂回しようとして、葦の海の道に旅立った。しかし民は、途中で我慢できなくなり、神とモーセに逆らって言った。「なぜ、あなたがたはわれわれをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。われわれはこのみじめな食べ物に飽き飽きしている。」

2. 不平を言った民に対して、神の罰が下った。「燃える蛇」と呼ばれる蛇の来襲であった。咬まれると、体中が燃えるように熱くなり死に至る毒を持つ、恐ろしい毒蛇だったようである。

21：6 そこで主は民の中に燃える蛇を送られた。蛇は民にかみついたので、イスラエルのうちの多くの者が死んだ。

3. 民がモーセのところに来て助けを求めたので、モーセは民のために祈った。

21：7 民はモーセのところに来て言った。「私たちは主とあなたを非難したりして、罪を犯しました。どうか、蛇を私たちから取り去ってくださるよう主に祈ってください。」モーセは民のために祈った。

4. 主はモーセに、作り物の蛇を旗ざおの上に付けるように命じ、かまれた者がそれを仰ぎ見れば、死なずに「生きる」、と約束された。実際、かまれてから、それを仰ぎ見た者は生きた。

21：8～9 すると主はモーセに言われた。「あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上に付けよ。かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きる。」

モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上に付けた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた。

□本日の課題 2問

1. 青銅の蛇を仰ぎ見ると、なぜ死なずにすんだのでしょうか？ 次の3つの選択肢から正しいものを選んでください。
  - ① 主が命じ、モーセが作った青銅の蛇には、特別な力が宿った。それを拝むなら、ご利益（ごりやく）があったのであろう。実際に、この青銅の蛇はその後も大切に保管され、イスラエルの人々にとって約700年もの間、崇拝の対象となった（参考、Ⅱ列18：4）
  - ② 青銅の蛇自体には何の力もないが、旗ざおの上に付け、それを仰ぎ見させることで、天に向かって祈る姿勢をとらせる。蛇にかまれて苦しくても、天に向かって生きたいと念じたら、癒やされたのであろう。
  - ③ 神の約束だから。旗ざおの上に付けられた青銅の蛇を仰ぎ見れば、生けると神が言われたのだから、その神のことばを信じる。その信仰を通して、神の約束を受け取った。
2. ヨハネの福音書3章では、イエスはご自身の十字架上の死を、この青銅の蛇と重ね合わせました。その理由として、あとの3つの選択肢の中で最も適切なものはどれでしょうか？

（イスラエルの教師ニコデモに対するイエスのことば、続いて使徒ヨハネの解説）

ヨハネ3：14～16 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」  
神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

- ① 青銅の蛇は作り物であって、人をかまないし、毒もない。それと同じように、イエスも犯罪人として処刑されたが、無罪であった。
- ② 旗ざおも十字架も木。木にかけられた者は神に呪われた者である（申命記21：23）。青銅の蛇は、神が燃える蛇を呪って無力化した。イエスの十字架は、イエスが身代わりになって神の呪いを受け、罪の代価を支払ってくださった。
- ③ 救いは神のわざであるが、二つのステップによる。第一は神の側から救いの手段が提供される。第二は人の側がそれを信じて受け取る。青銅の蛇もイエスの十字架も、神が提供してくださった救いの手段である。その救いを受け取るかどうかは、人の側がそれを信じるかどうか、である。